

ラテン語の音表象

森 田 信 也

Résumé

Shin'ya MORITA

La représentation d'un son par symbole en latin

Cet article porte sur la représentation phonétique des mots onomatopéiques en latin d'après l'étude de leurs équivalents anglais. Varron décrit déjà au temps de l'Empire romain les mots d'origine imitative. C'est en se fondant sur son point de vue que l'on considère les rapports onomatopéiques entre le latin et l'anglais. Par exemple, si l'on compare *glaciō* « glousser » en latin et *cluck* « glousser » en anglais, on constate que ce dernier subit un changement phonologique d'après la loi de Grimm. En revanche, l'anglais *croak* « croasser » ne subit pas de changement phonologique par rapport au latin *crōciō* « croasser ». En effet, ils ne dérivent pas de la même racine, mais il y a un point commun entre les deux mots. Ils sont tous les deux une représentation d'un son. Cette caractéristique commune se révèle par des analyses sémantique, phonologique et étymologique.

Abstract

Shin'ya MORITA

Sound Symbolism in Latin

This paper examines onomatopoeic words in Latin from a viewpoint of sound symbolism, referring to English equivalents. The words of imitative origin are already described by Varro in ancient times. To begin

with his view of them, we discuss the relation in onomatopoeia between Latin and English. For example, in parallel to Latin *glōciō*, English *cluck* has gone through a sound change called Grimm's Law. On the other hand, English *croak* has not gone through it, in parallel to Latin *crōciō*. We try to reveal a characteristic common to sound symbolism from semantic, phonological, and etymological points of view.

0. はじめに

Murmuri a similitudine sonitus, qui ita
Leviter loquitur, ut magis e sono id facere quam
ut intellegatur videatur. Hinc etiam poetae

Murmurantia litora.

Similiter fremere, gemere, clamare, crepare ab
Similitudine vocis sonitus dicta. Hinc illa

Arma sonant, fremor oritur;

hinc

Nihil me increpitando commoves.

From likeness to the sound, he is said *murmurari* 'to murmur,' who speaks so softly that he seems more as the result of the sound to be doing it, than to be doing it for the purpose of being understood. From this, moreover, the poets say

Murmuring sea-shore.

Likewise, *freme* 'to roar,' *gemere* 'to groan,' *clamare* 'to shout,' and *crepare* 'to rattle' are said from the likeness of the sound of the word to that which it denotes. From this, that passage:

Arms are resounding, a roar doth arise.

From this, also,

By your rebuking you alarm me not.

(Varro 'De lingua latina' 6:67)¹

ラテン語の *murmurari* 'to murmur/mutter' は、「唇をほぼ閉じてほとんど聞こえないようにささやく音」を示す印欧語根 *mu- と関連がある。ラテン語の *fremere* 'to make a low roaring/growl' は、ワローによって、既にオノマトペによる語彙であることが認識されている。この *fremo* という語は、

1 The Loeb Classical Library

語源的にも *bhrem- ‘to growl’ という印欧語根から派生したものであり、比較言語学の成果によって検証されるはるか以前に、ワローによる分析がなされている。ラテン語の clamare ‘to shout’ も、calare ‘to shout’ と同じく、*kel- という印欧語根から派生したものであり、crepare ‘to rattle/crack’ は、「繰り返し音がひびく」という意味の印欧語根 *ker- に由来するものである。この *ker- という語根は、「さまざまな騒々しい音や鳥の鳴き声」などを表わす語彙のベースをなしている語根でもある。このように、オノマトペ起源の語彙には、*mu-, *kel-, *ker- などの語根に由来するものが実に多い。本稿では、ラテン語の音表象という観点から、オノマトペに由来する語彙を量産する印欧語根とその語彙について論考することにする。

1. ワローによるオノマトペ起源の語彙

1.1 Murmuro

英語の mutter とラテン語の muttio や murmuro を対照してみると、どちらも、語源的に *mu- という印欧語根から派生している。原義は「口をあまり開けず不明瞭にものを言う」という意味である。ラテン語の muttio も murmuro も、ともに *mu- で始まっていて、英語では、mutter や murmur がそれに相当する。英語の mutter は、frequentative verb を形成する接尾辞を伴い、やはり *mu- で始まっている。ラテン語も同様に、muttio は、/l/ を重ね、murmuro は重複という形態論的な分析ができる。さらに、ラテン語の「ささやく」を意味する susurro も形態論的に同様である。

1.2 Fremo

語源的には、fremo は、*bh(e)r-em 「引っ搔き回すような動作」および「それに伴うパタパタいう音」を意味する語根か、あるいは、ギリシャ語では bremo という synonym も派生している「うるる」を意味する *mrem- という語根由来とされている。語頭の *mr- と *br の交代は、Walde-Hofmann のラテン語の語源辞典では、unsicher という形容詞で、同様に Ernout と Meillet の語源辞典でも同様に vague という形容詞で、それぞれ分析されているが、もう少し、普遍的に眺めると、/m/ も /b/ も共に音韻的には bilabial で、日本語においても、「さみしい」と「さびしい」に見るように、同段通音という現象が見られることから、部分的な free variants と考えることも可能である。ゆえに、本稿では、*mr- も *br- も区別せず、オノマトペという古代の音表象という観点において、不可分なものとしてとらえるという立場を採りたい。

フランス語の bruit 「騒音」という語彙もまた、ラテン語の rugio ‘to roar’ と俗ラテン語の brago ‘to bray’ のハイブリッドである。オノマトペを強調するために、自然発生的に、不安定な流音 /r/ の前に /b/ を発声することで、音的に安定させる効果があると同時に、より「うるさい」感覚を持たせるというオノマトペ的な効果がある。実際に、ラテン語の語彙には、rugio と並んで、rudo ‘to

roar/bray' と rumor 'noise/talk' が存在し、いずれも、Pokorny²の印欧語根辞典に、*reu- 'to roar/emit a hoarse sound' という 'sound-root' であると定義されている。このフランス語の bruit という語彙は、*ru- が、オノマトペ効果を狙って自然発生的に *bru- になったという一つの普遍的な音表象を示唆するものと考えられる。

1.3 Clamo と「叫び声をあげる」という意味を表わす三つ子の語根

Ces mots sont peut-être apparentés à une série de termes divers indiquant des « cris », des « bruits » ---- et peut-être des élargissements tels que lat. *clamo*, *clango*; en somme, l'ensemble des mots expressifs présentant *kr-*, *kl-* à l'initiale pour indiquer des bruits³.

Ernout と Meillet の語源辞典では、clamo は calo の拡張形と考えられている。Walde-Hofmann の語源辞典でも、*qel- という語根が 'Schallwurzel' 「音を示す語根」⁴であると説明されている。さらに、Pokorny も、*gal-, *qel-, *ghel- の 3 つの語根を Schallwurzeln⁵と定義している。

Clango は、Pokorny⁶および Ernout と Meillet⁷において、*kel- の拡張形の一つだと説明されている。他にも、この *kel- という語根から派生した *kal- は、古英語では hlōwan 'to roar/low' となり、ラテン語では kalendae 「ローマ時代の朔日」という形になる。古代ローマの暦では、毎月の朔日を知らせるのに「叫んで」回ったことから、「叫ぶ」と強く関係している。つまり、月の初日はオノマトペ起源の語彙なのである。さらには、ラテン語の clarus 'clear/bright' も派生するが、これは、印欧語根の *kleu- 'to hear' が、古英語では hlystan 'to listen' そして hlūd 'loud' と発展の仕方が相似形である。「明瞭に叫ぶ」から「明瞭な・はっきりした」という意味が派生し、「はっきり聞こえる」のは、「大きな声で」はっきり話せば、よく「聞こえる」からである。

そこで、これらの意味の派生について、音の拡散と光の拡散が同じ語根で表現さるといふ仮説を考えてみたい。実際に、現代英語でも、'loud color' という時の loud は視覚的にも用いられるし、現代ドイツ語の hell は 'bright/loud/resounding' という意味を持ち、ラテン語の clārus と非常に似て、聴覚と視覚と両方の意味を持っている。

Ernout と Meillet は、/kr/ および /kl/ で始まる語彙群は、オノマトペ的效果を伴って「音」を表わ

2 Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, p.867

3 Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.88

4 Walde und Hoffmann, *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, p.142

5 Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, p.428

6 *ibid.* p.599

7 Ernout et Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, p.88

すと考えていた。英語では、glimmer, glitter, glowといった語彙群に代表される/gl/という音の擬音効果に対して、glideやglissadeは、slide, slip, slickなどの/sl/で始まる語彙群を思い起こさせる。

*kel-と同様に、*gel-/*gal- 'to call/shout' は、古ノルド語のkella 'to call' および中英語のclateren 'to clatter' やラテン語のgallus 'cock'へと発展する。さらに、*gel-/*gal-という印欧語根は、glōciō 'to cluck as a hen' やgloctorō 'to cry as a stork' glicciō 'to cry as a goose' glaucitō とglattiō 'to yelp' という語彙群に見るように'sound-root'を形成しているように思われる。これらのラテン語の語彙群はすべて/gl/で始まり、現代英語の/kl/で始まる、cluck, clatter, clack, cacleに対応している。さらには、英語のgaggleとドイツ語のgackernは、形態素は異なるが、ガチョウが「ガーガー」鳴くさまという点では、英語は/g/のgeminationに反復の接尾辞-leがついて、ドイツ語は反復相の接尾辞-rmが使われている。

印欧語根*ghel- 'to call' は、古英語ではgiellan 'to sound/shout'になり、やがて、yellになり、gielpān 'to boast/exult'になり、やがてyelpとなる。また、nightingaleという語と語源的に関連するgelan 'to sing' も同根である。こちらはもっぱら、聴覚的なニュアンスが強い。これに対し、*ghel- 'to shine' は、色彩、輝く金属、胆汁など、視覚的な語彙群を生み出している。実際に、英語では、/gl/音で始まる語彙群が実に多く派生している。Gleam, glimmer, glint, glisten, glister, glitter, glimpse, glare, glance, glade, gloaming, gloss, glow and gladなどがその例である。*gel- 'bright' も、原義は'to shine'よりは'to scrape/rub'という意味に近く、英語のcleanやcleanse、ドイツ語のklein「小さい」へと意味が発展する。これは、「こすって磨く」と「光り輝く」という方向性と、「削る」⁸と「小さくなる」という異なる方向に意味変化をした結果である。いずれにせよ、印欧語根*kel-, *gel-, *ghel-は、三つ子のような存在で、音表象という通奏低音で密接に関連して意味を展開している。

1.4 crepāre

印欧語根*ker-は、「大きな音」や「鳥」に関係した擬音的語根であるが、ラテン語のcrepō 'to rattle' やcrōciō 'to cry/croak as a raven'そしてcrociō 'to croak loudly'などがここから派生している。本来的には、*ker-は、ガラガラ・カサカサしたような音や動物の鳴き声⁹のオノマトペを意味する語根であったことから、corvus「カラス」やcornix「カーカー（という鳴き声）」も派生している。

*ker-に対して、*gar- 'to shout' は、ラテン語のgarriō 'to chatter'が、また*ger-からは、*grūs 'crane'が派生している。グリムの法則に従うと、印欧祖語の/gr-/はゲルマン祖語では/kr-/に音韻変化するので、ラテン語のgrūsが古英語のcranつまり現代英語のcraneに対応するのは、音韻法則上、理に

8 Tucker, *Etymological Dictionary of Latin*, p.110

9 Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, p.567

かなっている。同様に、印欧祖語の /kr-/ はゲルマン祖語では /hr-/ になるので、ラテン語の *corvus* が、ゲルマン祖語の *hrabnaz* つまり古英語の *hræfn*、現代英語の *raven* が対応するのもグリムの法則通りである。

しかるに、現代英語の *croak* という語について考えてみると、古英語の *cræccettan* にさかのぼり、Klein によると¹⁰、*crow*、*creak* など関連する派生語は、全て *imitative origin* とある。語源的には古英語に由来するゲルマン系の語彙なので、ラテン語の *crōciō* には語源的には対応しないが、音表象的には、オノマトペ起源で自然発生したという普遍的な共通点がある。比較言語学的には、関連付けることはできないが、Varro 的感性を援用すれば、両者には「音表象」という普遍的な「語根」でくることができると思う。確かに、音韻法則に従えば、英語の *crow* は、**gar-* にさかのぼるのだが、動物の鳴き声や、それに由来する名称の起源は、時代や語派を超越して、潜在意識下で、*crow* はラテン語の *crōciō* と音表象という共通の発想を見出すことができる。比較言語学の作法からは外れるが、/kr-/ という音表象は、インド・ヨーロッパ系の言語においては、地域も時代も関係なく、共通の「感性」を共有しているように思えてならないのである。

2. 重複

日本語でも「雨がザーザー降る」、「あひるがガーガー鳴く」など、オノマトペの一つの特徴は、音を重ねる「重複」という語構成である。英語の語彙でも、*gaggle* や *cackle* のように、「反復」を意味する接尾辞 *-le* を伴う語構成が非常に多い。加えて、/g/ や /k/ の重複という現象も合わせて見られるケースも多い。そこで、語構成における「重複」という現象について考察してみることにする。

2.1 *baba-と*balbal-

英語の *babble* とラテン語の *babae* は、どちらも「音表象」¹¹ という観点から眺めてみると、同根から派生した語彙である。ラテン語の *babae* は、一種の間投詞的な「叫び」であり、英語でいうところの ‘Goodness me!’、‘Wonderful!’ ‘Strange!’ のようなニュアンスを持つ。同根の *balbus* も、‘stammering/stuttering’ の意で、やはり「反復」する音を含んでいる。ロシア語の *balalaika* 「バラライカ」も同根の擬音語である。このように、語構成に見られる形態論的な「重複」は、オノマトペの特徴ということができる。

英語の *babble* は、*crackle* 「パチパチ音が鳴る」同様、反復動詞を形成する接尾辞 *-le* を含んでいて、ラテン語の *blaterō/blatterō* や *blattiō/blatiō* が対応する語彙である。綴り上の *t* の重複が見られるのは、

10 Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, 2 Vols, p.177

11 Pokorny, *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, p.91

オノマトペ効果を増すための手段で、英語の「反復」の接尾辞 *-le* に相当する機能と分析される。

**baba-* もまた、*baby* を示す幼児語であり、中英語の *babe* は赤ん坊をあやす ‘*lull a baby*’ という行為由来の擬音語である。イタリア語の *bambo/bambino* ‘*child/kid*’ やロシア語の *baba* ‘*old woman*’ なども同様の擬音語である。日本語でも「婆」/*baba* /「爺」/*jiji* / などやはり語構成上の重複が見られるが、自然発生的に生じた擬音語起源の語彙に、普遍的見られる音表象と見ることもできよう。

中英語の *babe* は日本語で赤ん坊をあやす時に発声する「バブバブ」「イナイイナイバー」に通じるものがあり、ロシア語の *baba* は、若干 *pejorative* なニュアンスを持つ日本語の「ババア」に通じるものがある。音表象という観点に照らせば、単なる偶然の一致とは考えにくい。印欧語根に相当するような大きなくくりとしての音表象語根というくくりを言語学上に想定してみたくなる。

日本語の「ベラベラ (しゃべる)」は、英語の *babble* に通じ、ロシア語の *bolboltb* も ‘*to chatter*’ を意味するのも偶然とは思えない。ドイツ語の *babbeln* は現代英語の *babble* と同根である。

2.2 ラテン語の鳥の名称

--- de his pleraeque ab suis vocibus ut haec:

Upupa, cuculus, corvus, hirundo, ulula, bubo; ---

--- of these, very many are named from their cries,

As are these: *upupa* ‘*poopoe*,’ *cuculus* ‘*cuckoo*,’ *corvus* ‘*raven*,’ *hirundo* ‘*swallow*,’ *ulula* ‘*screech-owl*,’ *bubo* ‘*horned owl*’; ---

(Varro ‘*De lingua latina*’ 5:75)¹²

鳥の名称は、その鳴き声に由来するものが多い。Varro の「ラテン語について」のなかでも、*cucūlus cuculat* ‘*A cuckoo cries cuckoo*’ *bubo cucubat* ‘*An owl hoots*’ *cornix cucurrit* ‘*A crow caws*’ と述べられている。ラテン語の *cacabo* は、ヤマウズラの鳴き声を示す語だが、英語の *cackle* もこれに通じるものがある。ラテン語では接辞を用いず、音の重複により擬音語を形成し、英語は反復の接尾辞を伴う語構成が特徴といえる。

ラテン語の *tutubo* ‘*hoot*’ や *cucubo* ‘*hoot*’ のようなフクロウの鳴き声には、やはり重複が見られ、日本語でもフクロウは「ホーホー」と鳴き声を表わすのと同じである。人間の発声に関しても同様に、ラテン語の *murmurō* ‘*to murmur/mutter*’ や *susurrō* ‘*to whisper*’ も、重複を伴う語構成ゆえ、特にオノマトペ的効果を認識できるのに似ている。

12 The Loeb Classical Library

3. 英語の音表象

3.1 *ster-/stre-

印欧語根 *ster-/stre- は絶え間なく動く様やその動きに伴う「サラサラ」「カサカサ」という音を含意している。つまり、「こする・磨く動作」「カサカサという音」そして星の瞬きのような「キラキラ・ピカピカ」という擬態語も含意する。「ゴシゴシ」と繰り返し「磨く」ことで、「ピカピカ」に光るという一連の動作と結果を一つの事象としてとらえる語根ともいえる。ラテン語の *stertō* 'to snore' *strepō* 'to make a noise' *sternuō* 'to sneeze' *strīd(e)ō* 'to hiss/buss' も同根から派生した語彙群で、いずれも「音」を出すという事象でくくることができる。

一方、現代英語の str- で始まる語彙群には、「細長い」ことを含意するものが多い。例えば、*strap*, *strip*, *string*, *stripe*, *streak*, *stream*, *street* などが挙げられる。英語とラテン語の $\sqrt{\text{str-}}$ の表象は大きく異なっている。

3.2 /sn-/ /fl-/ /gl-/ で始まる語彙群

現代英語では、sn- で始まる語彙は、主に4つの語彙群に分類できる。まず第一に、*snarl*, *sneeze*, *snore*, *snort* など「音を発する」行為、第二に、*sneer*, *sniffy*, *snook*, *snub* など、「鼻で笑う・あしらう」行為、第三に、*snout*, *snoop*, *snuff*, *sniff*, *snivel* *snizzle* など「鼻」と「鼻で出す音」を示す語彙群、そして第四に、*snick*, *snip* など「チョキン・プツン」と切る行為にそれぞれブルーピングできる。大きなくくりとして、英語の $\sqrt{\text{sn-}}$ は、潜在意識下で、目に見えない「細い紐」という音表象で緩く、細く「鼻」の観念と結びついているように見える。

英語の fl- は、印欧語根の *pleu- から派生したもので、大きく2つに分類できる。一つは、*flow* という観念で、もう一方は、*fly* という観念である。前者は、古英語の *flōwan* にさかのぼり、*fluent*, *fluid*, *flux*, *flow*, *flush* (the toilet) などの語彙群で、後者は、*flēotan* にさかのぼり、*fluff*, *floss*, *fleece*, *flutter* などの語彙群である。これらは、語源的に同根から派生していることに加えて、/fl-/ という音の響きを持つ擬音語・擬態語というくくりで一つの音表象が際立っている。

現代英語において、gl- で始まる語彙のほとんどが、印欧語根の *ghel- 'to shine' にさかのぼる。例えば、*glare*, *gleam*, *glimmer*, *glisten*. *Glitter* *gloom*, *glow* などの語彙群である。Gl- に対して、sl- で始まる語としては、*slide* や *slur* (of musical notes) などが典型例で、*slime*, *slip*, *slick* など同様の例である。

オノマトペという観点では、こららに似た例として、-ump で終わる語彙群、つまり *bump*, *dump*, *clump*, *crump*, *stump*, *flump*, *thump* のような語彙群もまた、'slump' 「ドスン、パタン、ストーン」という音の観念を伴った語彙群で、音表象としては /-ump/ というオノマトペ的なくくりを想定できよう。

4. 結論

歴史言語学の観点に照らせば、ラテン語の *glōciō* に対して、英語の *cluck* はグリムの法則を経た同根の語彙である。歴史言語学の作法とは別に、本稿で繰り返し述べてきた「音表象」という観念で眺めてみると、英語の *croak* は、時代と語派と比較言語学という科学的な視点を超越して、ラテン語の *crōciō* と、自然発生したオノマトペ起源の語彙であると位置づけたい。

*gal- 'to shout/call' も擬音語形の *gall- がラテン語の *gallus* 'cock' になり、もともとは 'the calling bird' を意味する語であった。この語は、*Gallus* と *Gallic* とも関連すると考えられ、「ガリア人の鳥」という連想を持っていた。実際に、おんどりは、ローマ人、ガリア人の *iconography* として重要なシンボルであると考古学的にも証明されている¹³。

当時の音表象として /gl/ は、「視覚」「聴覚」「それに伴う意味」の三位一体をなし、三要素が潜在意識下で密接に結びついていたという仮説を立てたい。英語で *gaggle* という語彙の初出は1350年ごろである。ガリア人たちがニワトリをシンボルにしたのは、そのはるか昔で、時を経て、*onomatopoeia*, *sound symbolism*, *synesthesia* という3つの観点において、そこには、ラテン語と英語の共通の発想が普遍的に見て取れる。それが、本稿で繰り返し述べてきた、*crōciō* と *croak* の関係もグリムの法則を超越した普遍的な関係を主張する根拠でもある。

Cornix と *corvus* も *ker- から派生した同根語で、プリニウスによると次のように述べられている。「前者は、左側に出現すると吉兆と考えられ、後者は、言い伝えによると、もともと白い鳥だったものが、不義により罰で黒くなった」とある¹⁴。また、その予知能力により、右に飛んでゆくと幸運とされた¹⁵。

その迷信ゆえに、カラスの鳴き声は当時、非常に示唆的だったにちがいない。鳴き声を示す音表象が、普遍的なオノマトペとして、迷信とともに、言い伝えられたと考えても矛盾はない。

参考文献

- Ernout, A. and Meillet, A. (1985) *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, Klincksieck.
 Ernout, A. and Meillet, A. (1974) *Morphologie historique du latin*, Klincksieck.
 Gaffiot, F. (1934) *Dictionnaire latin-français*, Hachette.
 Hoad, T. F. (1986) *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*, Clarendon Press.
 Holthausen, F. (1934) *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter.
 Klein, E. (1966-7) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, 2 Vols, Elsevier.
 Kluge, F. and Seebold, W. E. (1995²³) *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Walter de Gruyter.

13 Watkins, *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, p.18

14 Lewis and Short, *A Latin Dictionary*, pp.471-2

15 *ibid.* p.475

- Lewis, C. T. and Short, C. (1933) *A Latin Dictionary*, Clarendon Press.
- Meillet, A. (1964) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, University of Alabama Press.
- Pokorny, J. (1989) *Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch I, II*, Franck Verlag Bern und Stuttgart.
- Prokosch, E. (1939) *A Comparative Germanic Grammar*, Linguistic Society of America, University of Pennsylvania.
- Streitberg, W. (1974) *Urgermanische Grammatik*, Carl Winter.
- Sweetster, E. (1997) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge University Press.
- Tucker, T. G. (1931) *Etymological Dictionary of Latin*, Ares Publishers Inc.
- Watkins, C. (1985) *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots*, Houghton Mifflin Company.
- Walde, A. and Hoffmann, J. B. (1982) *Lateinisches Etymologisches Wörterbuch*, Carl Winter.